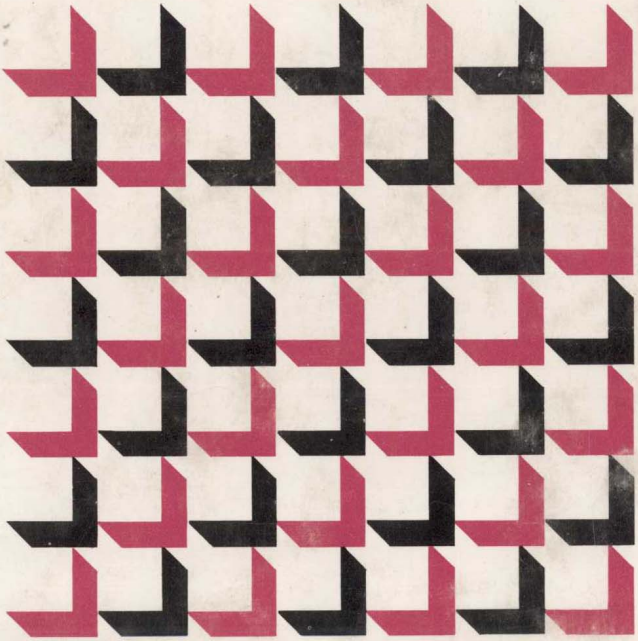
経済学批判プランと『資本論』

――現代資本主義論への展望――

コーガン著
中野雄策訳



大月書店

なかのゆうさく
中野雄策

1932年　朝鮮釜山に生まれる
1962年　一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了
現　在　関東学院大学経済学部教授（経済原論）
現住所　横須賀市湘南鷹取3-3-20
訳　書　『マルクスと経済学の方法』（共訳・大月書店）

経済学批判プランと『資本論』

1979年1月19日第1刷発行　　¥1900

訳　者© 中野雄策
発行者　平　智享

発行所　株式会社　大月書店　印刷 三晃印刷　製本 中條製本
〒113 東京都文京区本郷2-11-9 電話（813）4651 振替東京3-16387

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください．

経済学批判プランと『資本論』

——現代資本主義論への展望——

コーガン著
中野雄策訳

大月書店

А. М. Коган

«ПЛАН ШЕСТИ КНИГ К. МАРКСА И "КАПИТАЛ"»

Работа депонирована в Институте научной информации по общественным наукам АН СССР (ИНИОН). Сообщение о депонировании помещено в журнале "Новая советская литература по общественным наукам. Экономика", 1976, No. 9, стр. 90 (No. 1260).

Москва 1976

1979 by Otsuki Shoten Publishers, Tokyo
From Russian translated
by
Y. Nakano
Printed in Japan
This Japanese edition is published by arrangement with the author and Copyright Agency of the USSR. Moscow through Japan-Soviet Copyright Center, Tokyo.

凡　例

一　本書は、ソ連邦科学アカデミー社会科学情報研究所（ИНИОН）に寄託されたア・エム・コーガンの著作『カール・マルクスの六部著作プランと〝資本論〟』、モスクワ、一九七六年（А. М. Коган《План шести книг К. Маркса и "Капитал"》, Москва. 1976.）および同著者の最近の諸論文をもとに、原著者が訳者ならびに大月書店の求めに応じて、一つのまとまりのある著作として書き改めたものである。本書の原テクストはすべてタイプ原稿であり、これが公刊されるのは、ソ連邦をふくめても、今回が初めてである。なお、日本語版の刊行にさいして、原著者は本書の書名を《План экономических исследований К. Маркса и пути развития общей теории капитализма》（『マルクスの経済研究プランと資本主義の一般理論の展開方法』）と改めたが、簡略化のため、『経済学批判プランと「資本論」――現代資本主義論への展望』とした。

一　原文にアンダラインがある箇所には、訳文では傍点を付した。ただし、見出しはこれによらなかった。

一　原テクストの脚注は、訳文の該当箇所に＊印を付し、本文パラグラフ末にその説明文をおいた。

一　訳者による簡単な補注は、本文該当箇所に〔　〕に入れて示した。

一　著書・雑誌・新聞名には『　』を、論文名および引用文には「　」を用いた。

一　マルクス、エンゲルス、レーニンの著作からの引用は、おおむね大月書店刊の『マルクス＝エンゲルス全集』、『レーニン全集』によっている。文献注のうちで、たんに全集と記してあるのは、これらのことである。ただし、マルクスの経済学草稿類については、それらのノート番号およびノートページによって示してある。

一　人名・地名はできるだけ原地よみに近く表記したが、慣用的なものについてはこの原則に従わなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本の読者へ

『資本論』はすでに一〇〇年以上ものあいだ、はげしい闘争の目標とされてきました。マルクス主義に敵対するものは、マルクスの思想をくつがえそうとして、無数のこころみをやっています。しかし、マルクスの理論的遺産にたいする幾百万の人々の関心は、弱められなかったばかりか、逆に強められてきました。今日の読者は、現代資本主義の新しい諸現象を認識するために、かくも重要なこの遺産のなかにマルクス主義的経済理論をさらにいっそう展開するためのもろもろの出発点を見いだしています。マルクスが主として一八五七―一八五八年に、すなわち『資本論』の最初の準備草稿が執筆された時期に、作成した六部著作プランは、そのような出発点の一つです。この専門著作のなかでこころみられているのは、マルクスが『資本論』を完成したのちこのプランにしたがって競争、信用、株式資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場についての一連の特殊理論を仕上げる意図をもっていたことを証明することです。私は、この問題にかんする私の意見を日本の読者たちの審判にゆだねるにさいして、日本のマルクス主義者が特殊的諸理論の究明にみずから寄与されるだろうということを確信しています。

一九七八年一〇月

教授　ア・エム・コーガン

目次

凡例……三
日本の読者へ……五
序言……九
第一章　マルクスの六部著作プランの方法論……一三
第二章　六部著作プランと『資本論』執筆の諸段階……五一
第三章　マルクスの経済研究プランの起源……六四
第四章　『資本論』と若干の経済学的範疇にかんする特殊理論……八九
第一節　序論的注釈……八九
第二節　競争、信用、株式資本……九四
1　競争……九四
2　信用……一〇九
3　株式資本……一二三
第三節　土地所有……一二七
第四節　賃労働……一四九

第五節　国家、外国貿易、世界市場……一八二
第六節　方法論上の若干の問題……一九六
第七節　剰余価値論の仕上げがいっそう深められ、長びいた原因……二〇四
第八節　六部著作プランにたいする誤った接近の認識論上の源泉……二一三
第五章　六部著作プランの意義……二一八
第六章　競争にかんする特殊理論の問題から商品への回帰運動……二三〇
第一節　上昇しつつある労働生産性のもとでの価格騰貴――問題提起……二三〇
第二節　類範疇としての価値および価値の諸変形……二三六
第三節　独占によって制限された競争のもとでの価値の変形……二五四
1　自由競争と独占のもとでの価値尺度――社会的必要労働時間――にたいする欲求の作用……二五八
2　労働種目と欲求……二六六
3　抽象的労働、および社会的必要労働時間にたいする欲求の作用……二七三
解説……二八五

序　言

資本主義経済の新しい諸現象の研究は、資本主義の一般理論の究明と不可分に結びついている。レーニンは、ロシア共産党(ボ)第八回大会における党綱領にかんする報告のなかで、資本主義発展のすべての段階で作用している合法則性のマルクス主義的分析に立脚してはじめて帝国主義を正しく理解することができる、と強調した。彼は、帝国主義の分析を独占体の支配、金融資本の形成等々と関連して発生してきた新しいものの考察にだけ帰着させようとこころみた点において、ブハーリンを批判した。* レーニンの提案と主張にしたがって、第一次党綱領であたえられた資本主義一般の特徴づけは、第二次党綱領のなかにも完全にもりこまれた。この特徴づけの最も重要な諸命題は、第三次党綱領でも再現された。

* レーニン「ロシア共産第(ボ)第八回大会」、全集、第二九巻、一五二―一五八ページ参照。

レーニンは、弁証法の諸原理の一つを、「低い段階の一定の特徴、性質、等々の高い段階における反復、および古いものへの外見上の復帰（否定の否定）」* として特徴づけた。弁証法のこのような原理は、研究のマルクス＝レーニン的方法論の必然的な環節である。この方法論にしたがうと、現代資本主義の諸特徴は、一般資本主義的合法則性のもろもろの変形として考察される。

* レーニン『哲学ノート』、全集、第二九巻、一九一ページ。

資本主義の一般理論は、マルクスによって、『資本論』のなかで、前独占的資本を素材として仕上げら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れた。「この著書（『資本論』――ア・コーガン）は、資本主義的社会構成の全体を、生きた構成体として――すなわち、日常生活の諸側面や、この生産関係に特有の階級敵対の社会的発現や、資本家階級の支配を保護するブルジョア的な政治的上部構造や、自由・平等、等々のブルジョア的観念や、ブルジョア的家族関係をともなった構成体として――読者に示すものである*」。しかしながら、『資本論』のなかでおこなわれた研究の完全かつ全面的な性格は、資本主義の一般理論のいっそうの発展を排除するわけではなく、むしろそれを前提するのである。

* レーニン『「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか？』、全集、第一巻、一三四ページ。

周知のように、『資本論』の最終目的は、ブルジョア社会の経済的運動法則を発見する、という点にある。マルクスは、まさにこの視角から資本主義のすべての多様性を研究したのであって、そのさい主要な課題の解決と直接に結びついていない個々の過程のもろもろの特質や側面を捨象したのである。『資本論』に立脚して資本主義の一般理論をさらにいっそう究明するためには、『資本論』の最終目的の視角からみると攪乱的事情としてあらわれるような資本主義経済の諸現象を研究することが前提される。レーニンの諸労作は、一般理論にたいするそのような接近の手本となる。彼は、最初期の著作の一つ（『いわゆる市場問題によせて』）のなかですでに、社会的資本の拡張再生産を研究しながら、主要な注意を、まさにマルクスが『資本論』第二巻第二一章で捨象した要因のうえに、すなわち資本の有機的構成の変化のうえに、集中したのである。このことによって彼は、新しいはなはだ重要な諸結論をもって資本主義の一般理論をゆたかにする可能性をえたのである。レーニンは、『資本論』の諸命題のなかに、資本主義の一般理論の問題の解決を見いだしただけでなく、それの問題提起をも見いだした。

資本主義の一般理論は、マルクス主義経済学のどの構成部分とも同様に、汲めどもつきぬ創造的可能性をそなえている。しかし、このことは、かならずしもつねに考慮されているとはかぎらない。現代資本主義の独自性を反映するあれこれの結論を確証するために『資本論』のしかるべき命題を見つけださなければならないばあいにようやく、資本主義の一般理論にときおり注意がむけられるにすぎない。しかし、『資本論』の諸命題は、現代資本主義の諸現象を直接に説明するための出発点であるばかりでなく、資本主義の一般理論をあらゆる方向へ展開していくための出発点でもある。

資本主義の一般理論の展開は、われわれを現代からひきはなすのではなく、それに近づける。というのは、資本主義の一般理論は、独占体の支配のために複雑化した資本主義のもろもろの現象や過程を適切に反映させるために必要な媒介環節をあたえてくれるからである。

レーニンは、マルクス主義理論の創造的性格を強調してつぎのように書いた。「マルクスの理論は客観的真理である、というマルクス主義者が共通にもっている意見からの唯一の結論は、つぎの点にある。すなわち、マルクス理論の道をすすめば、われわれはますます客観的な真理へ近づくであろう（けっしてそれを究明しつくすことはないが）、ところがそれ以外の道はどんな道をすすんでも、われわれは混乱と虚偽以外のなにものにも到達することができない、という点にあるのである*」。レーニンのこれらの言葉は、資本主義の一般理論にも完全にあてはまる。

* レーニン『唯物論と経験批判論』、全集、第一四巻、一六七ページ。

本書の主要課題は、一八五七―一八五八年に仕上げられたマルクスの経済研究プラン（六部著作プラン）のなかでは『資本論』に依拠して資本主義の一般理論を展開するためのもろもろの基本方向が指示されている、ということを証明することである。

第一章　マルクスの六部著作プランの方法論

マルクスは、一八五八年に、経済学上の三つの著作を執筆する計画を立てた。第一は、経済学上の諸範疇の批判およびブルジョア経済の体系の批判的叙述である。マルクスは、この著作を『経済学批判』と名づけた。第二は、経済学と社会主義の批判と歴史である。第三は、経済学上の諸範疇あるいは経済的諸関係の発展の歴史の短い概要である。* マルクスは、「序説」（一八五七年八月）や『経済学批判』〔第一分冊〕（一八五九年）のなかで、また一八五八―一八五九年のいくつかの手紙のなかで、彼の経済学上の最初の著作のつぎのようなプランを書いた。**

第一部　「資本について」

第一篇　「資本一般」

第一章　「商品」

第二章　「貨幣」

第三章　「資本一般」

1　資本の生産過程
2　資本の流通過程
3　両過程の統一、あるいは資本と利潤（利子）

第二篇「諸資本の競争」
第三篇「信用」
第四篇「株式資本」

第二部「土地所有」
第三部「賃労働」
第四部「国家」
第五部「外国貿易」
第六部「世界市場」

＊　マルクス「フェルディナント・ラサールへ」、全集、第二九巻、四三〇ページ参照。
＊＊　マルクス『経済学批判』、全集、第一三巻、五ページ、同「エンゲルスへ」、全集、第二九巻、二四六ページ、同「フェルディナント・ラサールへ」、全集、第二九巻、四三〇、四三二ページ、同「ヨーゼフ・ヴァイデマイアーへ」、全集、第二九巻、四四八―四四九ページ、同『経済学批判要綱』、ノートM、二〇ページ参照。

マルクスがこのプランを最も完全に基礎づけたのは、経済学の方法論の精髄を解明した「序説」においてである。プラン自体が「序説」のなかの「経済学の方法」という節の結びとなっているのは、示唆的である。この節のなかでは、つぎのことが強調されている。「……経済学の諸範疇を、それらが歴史的に規定的範疇であった順序にしたがって配列することは、実行もできないし、まちがいでもあろう。むしろ、

諸範疇の順序は、それらが近代ブルジョア社会でたがいにもっている関係によって規定されているのであって、この関係は、諸範疇の自然的順序として現われるものや歴史的発展の順序に対応するものとは、まさに逆である。*」この命題のなかで問題となっているのは、ブルジョア社会における経済学的諸範疇の客観的相互従属性を反映する順序のことであり、資本主義の一般理論の科学的篇別構成のことである。

＊ マルクス『経済学批判要綱』、ノートM、二〇ページ。

マルクスは、科学上の最も複雑で非常に重要な問題としての経済学的諸範疇の順序の解明に、したがってまた六部著作プランの作成に、着手した。彼は、経済学的諸範疇をそれらの客観的相互従属性のうちに反映させようとし、六部著作プランのなかで資本主義の一般理論の科学的篇別構成をあたえようとこころみた。

六部著作プランの仕上げは、資本主義経済のすべての多様性の分析を前提するものであった。この多様性のなかには、商品、貨幣、資本一般（資本の核心的構造）、競争、信用、株式資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場がふくまれており、しかもこの分析の過程ではこれらの範疇の内的連関が解明されるはずであった（マルクスは、一八四三年から一八五七年にかけて、そのような分析をおこなった）。

六部著作プランの作成に先だって資本主義経済の多年にわたる研究がおこなわれたとはいっても、このプランの基本的内容を直接仕上げるためにほぼ二ヵ年（一八五七年八月―一八五九年七月）が費やされた。マルクスは、プランのいくつかのヴァリアントを作成した。それらは、細目の点でたがいに異なっており、ときにはかなり大きな差異があるが、主要な点では合致していた。本書では六部著作プランの基本的な方法論上の諸原則が考察される。したがって、プランの各種ヴァリアントの比較分析*は本書の範囲をこえるものであって、プランの最終ヴァリアントだけが研究の対象となる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com